

# メルシャン、国産ワインのブドウ畑で豊かな生態系を育む



小林 光 (東大先端科学技術研究センター研究顧問)

#生物多様性 | 2023/06/22 · 約6分で読める



後で読む

## ■小林光のエコめがね (31) ■

### 記事のポイント

1. メルシャンは長野県上田市に「椀子（マリコ）ヴィンヤード」を開場
2. 同社は遊休荒廃地を国産ワインのブドウ畑に転換した
3. 圃場では、希少種をはじめ草原を主な棲息地にする昆虫や植物が確認された

シャトー・メルシャンのブドウ畑「椀子（マリコ）ヴィンヤード」（長野県上田市）は、開業後20年の若い圃場だ。広さは約30ヘクタールで、かつては、桑畑であったが生糸業の衰退とともに放棄され荒廃農地となっていた。

地元で、再利用の方途を探っていたところ、メルシャンの目にとまった。メルシャンは、栽培委託をしている連携農家にはお願いできないような挑戦的なブドウづくりを広く行うため、直轄の営農のチャンスを探っていたのである。

この場所は、水はけの良い台地で風当たりも強い。日本でのワイン用ブドウの栽培の弱点である多湿やそれによる病害を防ぎやすい立地だった。

そうして高品質なブドウ栽培に挑戦しているうちに、予期せぬ効果が現れた。草原が蘇ってきたのである。その顛末は、以下のとおりであると聞いた。

### ■なぜブドウ栽培で草原が生まれるのか

そもそもブドウ栽培で、なぜ草原が生まれるのか。フルーツとしてのブドウ栽培は日本では棚仕立てで行うので、雨による土壌流出の心配は少ない。

しかし、ワイン醸造用の高糖度のブドウづくりの中には、収量が落ちるものの、糖分を果実を集められる垣根仕立てをするケースが多い。その場合は、ブドウの畝の間の地面は直接雨にたたかれる。そこで、侵食されないよう草地にする圃場づくりが行われる（写真参照）。開業時の圃場の草地づくりには、牧草数種の混合播種が行われた。



「椀子（マリコ）ヴィンヤード」の圃場づくり。環境NPOアースウォッチ・ジャパンのスタッフは、スマレの分布調査をしている

そうして開業した後10年以上たった頃、国産ワインのみで醸造したワインには「日本ワイン」との表示が公的に行える制度ができたので、メルシャンは、ブドウ栽培の拡大を経営方針とした。

その拡大先は、荒廃農地であるが、そうした拡大が、では、自然環境にどのような影響があるのか、知っておく必要が出てきた。

そこで、キリングroupとして、農研機構との共同研究を始めた。そうしたところ、環境省のレッドデータブックに載るような希少種を含め、草原を主な棲息地にする昆虫や植物が確認されたのである。

### ■草原の復活はワイン製造に影響があるのか

昔の日本には茅採り場などとして人為的に維持されてきた草原環境が広がっていたのに、今日では大いに失われてしまって、二次的な自然に依存してきた多くの生物種が絶滅の危機に瀕している。こうした貴重な草原をブドウ畑が回復したということになる。

しかし、かつての草原が十分再生した訳ではない。希少種の生息があってもなお脆弱な部分もある生態系である。

そこで、そうした部分では、自然に任せて生物多様性の向上を待つだけでなく、人手による介入も始めた。例えば、圃場内でかつての草原植物が残っている箇所において従業員が晩秋に枯草刈りを行って、その種入り枯草を、ブドウ畑の中に設定した再生場所へと敷き込んでいる。

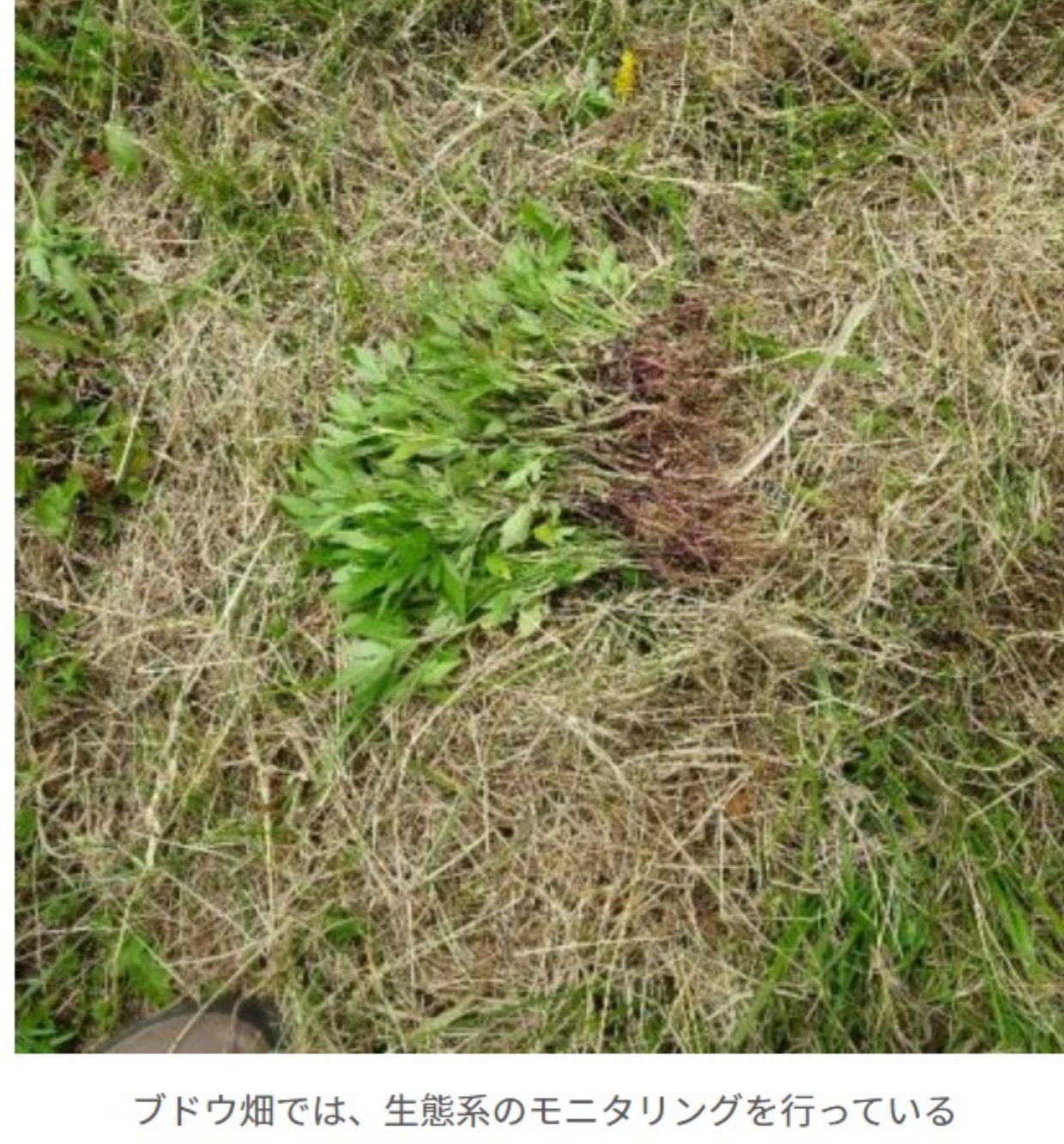
また、草原生態系のシンボリックな絶滅危惧種のオオルリシジミが4キロメートル程度しか離れていない東御（とうみ）市に生息していることに着目し、その食草のクララを挿し穂苗から育てて圃場内に植え込む活動も行っている。

論者は、椀子ワイナリーで他のワイナリーと同様にワイン祭り（千曲川ワインバレーの各所のワインフェスの一つ、春の椀子マルシェ）が行われる5月末の週末に現地を訪れ、見学してきた。

### ■生物多様性は向上したのか

訪問の関心の第一は、生物多様性は向上したのか、という点である。

前述の農研機構との共同研究（指導は楠本良延先生）では、ブドウ圃場草原の生態系の質の向上をモニターすることも行われている。



ブドウ畑では、生態系のモニタリングを行っている

1m×1mの枠の中の植物種を数える手法（枠取り法）では、平均的には種数が倍増していた。

また、2019年を初年度とするスマレの分布調査でも、分布域も密度も共に向上していることが見て取れる。ちなみに、スマレの播種は、なんとアリが行ってくれるのだそうだが、その分布域の拡大はアリの暮らしが豊かになる速度に律則されるので、生態系の豊かさの向上指標として使われるようだ。

この調査を担っているのはNPOのアースウォッチ・ジャパン。このマルシェの機会に定例のモニタリングが行われているので、論者も加えてもらった。

他方、ついでだが侵略的なふるまいが心配される外来種も増えている。これについては、除却の介入も行われていて、写真2のように、マルシェの当日にも大きな戦果（オオバクサの実生）があった。

### ■草原の復活はワイン製造に影響があるのか

論者の第二の関心は、豊かな草原の復活と本業のワイン製造とはどういう関係にあるのか、という点である。トレードオフがあるのか、両立できるのか、それともむしろウィンウィンなトレードオンなのか。論者としては、もちろんトレードオンを期待しての関心だ。

しかし、まだそこまでの数量的なデータは得られていない由であった。楠本先生によれば、生態系ができてくればブドウ葉上のクモが増え、葉の害虫の増殖を防いでくれるし、ホオジロのような食虫性の小鳥も生物防除の役割を果たす。

さらに、ムクドリのようなブドウ果実を食害する鳥には、猛禽類が草原を餌場にしてくれることにより、抑制的な影響を及ぼすことが期待でき、収量に良い効果を与え得る、という。



ヒバリの巣と4つの卵を発見した

スマレ調査で足元ばかり見ていたら、なんとヒバリの無防備な巣が4つの卵とともにあった。

草原の再生への希望が段々に形を備え現実化しているように感じた。高温多湿な日本で大規模なブドウ圃場を無農薬で運用することはできないとしても、同ヴィンヤードでは、生態系の強化とともに農業の一層適切な使用に取り組んでいく考えであるとも聞いた。

楠本先生は、豊かな生態系がワインの質にも好影響を及ぼさないかと期待しているようであった。当日の案内役を務めて下さったキリン本社のCSV戦略部の藤原氏は、個性あるワインとしての評価を得るには欠かせないテロワール（ワインが反映する、栽培地の気候、地質や植生などの自然の特性）の観点では、椀子の生産地呼称を支えるものとして草原復活が認識されるようになったことは、既にして成果だ、と考えていらしかった。

椀子ヴィンヤードで育つブドウは年間でボトル4万本分（勝沼で醸造するもの1.5万本を含む。）。草原再生がこれらのワインの量も質も高め、CSV、特にネイチャー・ポジティブなビジネスの模範例に育っていくことを期待したい。

ところで、論者個人は、桑畑がワイン用ブドウ畑に変わることに因縁的なものを感じている。

ワイン三昧（といっても10フラン以下の安ワインがほとんど）の日々を送らせてくれた40年前以上のフランス留学で、初めてブドウ畑を遠望した時の見間違いの記憶が蘇るからだ。

「フランスにも桑畑があるんだ」というのがその時の正直な驚きであった。それほど、色といい、葉の形、葉脈のもたらす陰影のマチエールといい、桑と垣根栽培のブドウはディテールまで似ている（日仏で非なのに似ている例には、あん肝とフォアグラなどもある）。

期待できるのは、したがって、草原の復活だけではない。養蚕を重要な副業とした農村の景観も再生されないか。カルチャー・ポジティブも私は期待したいのである。